男女共同参画推進委員会　第 67 回年次大会シンポジウム報告

日時：2012 年 3 月 26 日（月）13：30～16：40
場所：関西学院大学　　西宮上ケ原キャンパス　会場 CF
領域：物理と社会
主題：「ワークライフバランス－物理研究者の場合」
プログラム：

はじめに　（笹尾真実子　同志社大学）

招待講演　企業のワークライフバランス支援：働き方の改革（佐藤 博樹　東京大学大学院）

講演　１．大規模アンケート調査にみるワークライフバランス（江尻晶　東京大学）

２．在職場時間とワークライフバランス－大学教員の場合（加賀山朋子　大阪大学）

３．産総研研究成果データベースと出勤簿システムの分析について（澤田美智子　産総研）

４．在職場時間とワークライフバランス－研究所研究者の場合（村上泉　核融合研）

討論 司会　（嘉規香織　静岡大学）

報告

現在，物理学関連の研究に従事する多くの研究者においては，職場が大学であれ研究機関であれ，その仕事時間は非常に長い．実験家においては，良いデータをとることが最優先され，理論家においても思考の中断は大きなマイナスと考えられている．そのため時間管理は自分で行い「研究第一」に最適化する結果，仕事時間が長くなるものと考えられてきた．しかし，実情は少し複雑である．チームで研究を行う実験家の場合，リーダーが「研究第一」に研究計画を最適化しようとするとチームの構成員各個人のワークライフバランスは置き去りにされがちとなる．さらに近年では大学関連機関の法人化に伴って研究以外の「雑用」が増え，各種の委員会に関わる時間や評価のための業務，社会活動，報告書の量も増加しつつある．ネットの活用により，場所を問わず「仕事」ができることも，仕事時間が長くなる傾向に拍車をかけている．　その結果，特に「出産・育児」「家事」「介護」の主なる担い手である女性研究者にとっては質の高い仕事時間をとることが極めて難しくなってきた．このような現実は，経歴の伸展につれて女性研究者の割合が減少する要因の一つとなっている．男性研究者においても，職場における長時間労働をもたらし．人間らしい生活を確保することが益々困難になってきている．要は「時間の質」と「時間の量」であり，その確保である．

このシンポジウムでは，以上の視点で，企業でのワークライフバランスへの取り組みと最近の傾向を把握し，大規模アンケート結果の分析結果と研究所や大学のアンケート結果を紹介し，男性・女性物理研究者のワークライフバランスの現状を分析した．さらにパネル討論では，あるべきワークライフバランスを実現するためには，子育て・介護にかかわることも含めた多様な働き方が受容される職場環境、評価システム等の構築が必要であること、時間制約を前提とした働き方への意識の変化が求められている等が議論され、今後の男女共同参画推進の活動の方向性に関する認識を深める機会になった。常時25～30名で，延べ40名ほどの出席者があった．

このシンポジウムは，物理学会男女共同参画推進委員会の企画である．